

向井俊彦先生に学ぶ

上 瀧 真 生

はじめに

本稿は、二〇〇六年五月一二日に逝去された向井俊彦先生から教えを受けた者として、その仕事の今日的な意味を明らかにすることを目的としている^①。私は、哲学を専門に研究する者でもなく、また、先生との間に公的な師弟関係を結んでいた者でもない。しかし私は、大学生の時以来、先生の死の直前まで、折りにふれて親しく先生のお話を聞く機会を得、そこから学んできた。そういう個人的な経験をふまえながら、先生の仕事の意味を考え直し、今後、私たちが引き継ぐべきこと、考えるべきことを明らかにしたい。

向井俊彦先生は、生前、見田石介先生、鈴木茂先生の学問の系譜を継ぐ者として自らを位置づけられていた。これは、マルクス・エンゲルスによって切り開かれた科学の見地は今日においてなお十分に発展する力をもっており、それを二〇世紀後半に実際に発展させ、また、今日においてさらに発展させるための土台を築いたのは見田先生と鈴木先生であるという認識にもとづいていた。この認識はベルリンの壁崩壊に始まる二〇世紀末の「社会主義体制の崩壊」後も変わらなかつたし、むしろ、強まったと思う。そのうえで、自らと同様、見田、鈴木両先生の学問の系譜を継ぐ上野俊樹先生を畏友と呼ばれ、この学問の系譜の発展を担う

者としての自負と使命感を共有されていた。上野先生の死後、向井先生が、年四回程度、私が参加する研究会でヘーゲル論理学を講じてくださったのは、この学問の系譜を若い世代に引き継ぎ、発展させなければならぬという強い使命感の現われであつたと思う。

私は、生前の見田先生、鈴木先生から直接に教えることはできなかった。しかし私は、上野、向井両先生に導かれて、見田、鈴木両先生の業績に学び、その基礎の上でこそマルクス・エンゲルスによって開かれた科学の見地に立って科学を発展させることができると思えるにいたつた。上野、向井両先生亡き後、今後は見田石介―鈴木茂―上野俊樹・向井俊彦という学問的系譜を基礎にして仕事をしなければならぬと思う。本稿は、そのための一つの準備作業でもある。

I 理論と実践との理論的統一 ― 『唯物論とヘーゲル研究』という出発点

私が向井先生と出会つたのは、おそらく一九七九年、私が大学三年生のときであつたと思う。立命館大学経済学部の学生であつた私は、先生の哲学講義を受講した。その後もそうであつたが、先生の講義は浅学非才の私にはおそろしく難解で、当時の学生運動の忙しさを口実にしてサボタージュしたことも多かつた。先生はその年出版された『唯物論とヘー

『ヘーゲル研究』^②をテキストとされて実践的唯物論への批判を熟っぽく語られていたのだが、その意味が当時の私にはよく飲み込めなかったこともあって、後でテキストを読めばよいという安易な気分であった——このテキストがまた難解であったのだが——。しかし、その後、研究者という道を選択するにあたって、私は『唯物論とヘーゲル研究』で展開された実践的唯物論への批判から大きな影響を受けたと思う。

『唯物論とヘーゲル研究』における一つの中心的なテーマは、実践的唯物論——史的唯物論の基礎カテゴリーとして実践概念を位置づけようという主張——への批判であった^③。その批判の意味は、広くとらえると、理論と実践との関係を考え直すということである。その認識の基本点は、のちに向井氏自身がたびたび語った言い方によれば、「理論と実践との実践的統一ばかりでなく、理論と実践との理論的統一を考えなければならぬ」ということである^④。この見地からすると、実践的唯物論は理論活動を「理論と実践との実践的統一」に解消してしまい、理論活動の独自の内容と意味を見逃してしまう。そうではなくて、「理論と実践との理論的統一」とはなにかを明らかにすること、そのことよって理論活動の独自の内容と意味をあきらかにすることが、実践にとっても重大な課題である。これが向井氏の認識であった。

この批判の基礎になっているのは、見田石介氏の科学方法論の成果である。それは一言でいえば、マルクスの方法は分析的方法にもとづく弁証法的方法であり、この方法に基礎づけられてこそ、事物の科学的認識が發展するということであった。その基本点は、向井氏のまとめによれば以下のとおりである。

科学の方法は一般に分析・総合の過程である。「マルクス主義もまた例外ではないのであって、実践や良心、ヒューマニズムを強調すればマ

ルクス主義哲学であると思ったり、対象の科学的な認識を抜きにして、歴史の発展の魂を一挙に把握する弁証法なるものがあると思ったりするのは幻想にすぎない。社会を対象とする場合にもまた、事物を認識する唯物論の精神が堅持されなければならない」^⑤。

分析は、与えられた事実から出発して、抽象によって問題の条件を純化し、さらに事実の背後にある、その本質、実体、基体を分離する。このように「対象を分析して非歴史的な実体に行きつくことが、そのものの歴史性を明らかにする」^⑥。

そのうえでマルクスの弁証法的方法は、単純な分析・総合があきらかにしえないものを分析する。つまり、一つには「一方的前提に基づく単純な分析・総合に対して」「相互的な前提関係を分析」し、もう一つには、ことからの「主要な包括的なモメントを明らかにする」。このように、「弁証法的方法は、その基礎として分析的方法を必要とするばかりではなく、それ自身が独自の分析的方法なのである」^⑦。

こうして弁証法的方法は相互前提関係をとらえ、さらにその包括的なモメントをとらえることで主体・概念をとらえ、その概念からの発生的展開へとすすむ^⑧。しかし、それだけではなく、弁証法的方法は矛盾の分析をもおこなう。それは「二つの本質、二つの類の統一としての具体的なもの」を明らかにし、その消滅の必然性を明らかにするのである^⑨。

これらの見田氏の科学方法論の成果のうえに立って、向井氏は実践的唯物論を批判し、理論と実践との関係を考えたのである。氏にとって見田氏の科学方法論は、ルビンシュテインの研究成果とともに「人間の認識活動そのものの能動性」^⑩を明らかにしたものである。この見地から氏は、リッケルトの議論やフッサールの現象学や論理実証主義を念頭におきながら哲学の根本問題と実践概念について次のように述べる。「物質——意識関係」における意識から独立した物質⇨客観的実在の承認という

「哲学の根本問題についての唯物論的解答」は「認識論において人間の認識が如何にして客観的実在に及び得るものであるかを示すための前提」である。「客観的実在を否認するのは、人間の認識能力を根本的な仕方では疑っていることを意味し、人間の意識的な活動を結局は過小評価することになる」。したがって、実践的唯物論の主張のように哲学の「根本問題に実践をもち込むことは、実践が如何に重要であろうともかえって、実践が理論に対してもつ意味を理論の内部において提起させなくしている」^⑪。

では、「実践が理論に対してもつ意味」とはなにか。それはまずなによりも人間の認識自体が活動であり、能動的な実践であるということである。理論が客観的な実在を反映すると言うとき、その反映は受動的なものと考えられ、それとの対比で実践の能動性が強調される傾向がある。しかし認識活動を分析してみれば、「反映活動そのものが能動的な性格をもっていることが認識され、意識は理論においては受動的で実践においては能動的という、理論と実践との誤った区分が克服されるのである」^⑫。マルクスの「フォイエルバッハに関するテーゼ」の第一テーゼは、従来の唯物論では「対象、現実、感性がただ客体または直観の形式のもとにのみ捉えられて、人間的・感性的活動、実践としては捉えられず、主体的には捉えられていない」と批判している。このテーゼについて、実践的唯物論は認識を導くのは実践であるというように解釈するのであるが、ここで述べられていることはそうではない。このテーゼは「人間の感性的世界の基礎が人間の感性的活動にあること、つまり生産されたものであることの認識を強調しているのである」^⑬。

人間は労働という実践によって自然を変革し、社会を形成する。そういう自然と社会が人間の認識の対象となる。さらにいえば、労働をつうじて人間は感性・知覚を発展させる。人間は労働によって自らの自然を

変革するし、自らの感覚器官の機能を越える道具を作成する。人間の認識活動の基礎には労働という実践があるのである。

また、そのような対象をとらえる知覚も、思考も、人間の能動的な実践である。そして、それらは一般に分析・総合活動である。このことは、人間の意識のはたらきを心理学的に研究したルビンシュテインが明らかにしているところであるし、また、先にみたようにマルクスの科学方法論を研究した見田氏が明らかにしているところである。知覚については例えば、人間は外界の情報をいったんいくつかの要素に分解し、さらにそれを総合して、その知覚像を獲得する。たとえば、視覚においては外界の情報はいったん色、かたち、明るさなどの要素に分解され、脳の様々な部位で処理され、さらにそれらが総合されて、一つの視覚像を結ぶ。人間の知覚は分析・総合の能動的な活動なのである。

理論にたいして実践がもつもう一つの意味は、それが真理の基準として機能するということである。向井氏はこう言う。「認識の歴史的條件を強調するのに、実践によって理論の対象が与えられる条件を強調するよりもむしろ、真理の基準としての実践を強調しなければならぬ」。「人間による対象の認識がどのかぎり、その対象そのものと一致しているかを示す基準が実践なのである」^⑭。

認識活動によって得られた理論がどの程度現実を反映しているかを示すのは、人間の実践である。このことを端的に示したのが「近代科学の実験的方法」である。近代自然科学においては、理論の真理性は実験あるいは観測によって検証されなければならない。社会科学においても、その理論の正しさを最終的に示すのは社会的な実践である。こうして実践は理論にたいして真理の基準という意味をもつのである。このことは逆にいうと、理論が実践の必要を越えていたり、一定の歴史的条件のもとでは実践によって検証できない領域にまで踏み込んでいたりすること

を意味している。この面では、理論の能動性をより積極的にみなければならぬ——もちろん、その真理性は最終的には実践によって検証されなければならないのであるが¹⁶⁾。

最後に、理論と実践との関係において重要なのは、実践を導くような科学的な理論、価値判断を導くような事実判断の必要性である。向井氏は言う。「発展法則の認識もまた客観的な認識でなければならぬ」。「人間が社会を変革できるのは社会を实践的に考えるからではなくて、社会の客観的な発展法則の認識に基づき実践を行なうからであろう」¹⁷⁾。

人間は現実の法則を利用することによってしか、現実を変革することはできない。したがって、それが経験的な認識であるにせよ、科学的認識であるにせよ、実践の基礎には現実の法則についての認識がある。このことは自然についても、社会についても、同じである。社会を変えるには、社会の発展法則を客観的につかまなければならない。そういう法則をつかまえる理論が実践を導くのである。

向井先生の「理論と実践との理論的統一を考えなければならない」という認識は、学生運動のなかにあつて実践に埋没しがちであつた若い私に科学研究の独自性と必要性を教えるものであつた。私自身が研究者の道を選び、その道を歩んでいくうえで、先生の教えは理論活動の社会的意味を確認する道標であり、支えであつた。今日においても若い世代のなかには、その形態は異なるが、社会の実践的諸問題について早急な実践的解決を求める（あるいはそれが困難であるとみなして早々にあきらめる）傾向が多々見られる。先生の認識は今なお意味をもっている。実践的に重要な問題であるからこそ、その問題を理論的に明らかにしなければならない。このことが私たち研究者の存在理由であろう。

II 人間の実践の意識的性格とイデオロギー——

「アルチュセールのイデオロギー論についての批判的検討」が示すもの

一九八〇年代半ば、向井先生の関心は史的唯物論の再検討に向けられていた。その過程では、アルチュセールやハーバースの理論が批判の俎上にのぼせられた¹⁸⁾。とくにアルチュセールのイデオロギー論についての批判的検討は、同時期の上野俊樹先生のイデオロギー論の展開とともに、当時、大学院を経て大学教員の職を得た私が科学とイデオロギー、そして人間の発達、さらには教育ということ深く考える契機となつた。

この時期の向井先生のアルチュセールに対する批判的検討は、上野先生との協同と競争をつうじておこなわれたと思う。上野先生は『経済学とイデオロギー』（一九八二年）および『アルチュセールとブーランツァス』（一九九一年）のなかでアルチュセールの理論の批判をおこなっている¹⁹⁾。向井先生はこれらの仕事の意味を積極的に評価されながら、折にふれて「アルチュセールに注目したのは私のほうが早かつたんよ」と述べられていた。また、上野先生も『アルチュセールとブーランツァス』のなかで「向井俊彦氏の『アルチュセールのイデオロギー論についての批判的検討』……（略）……は、フロイト、ラカンをはじめとして、エーリッヒ・フロム、チョムスキーなどの議論とアルチュセールとの関係を視野に入れ、かつネオ・マルクス主義の批判を意識して書かれた包括的なすぐれたアルチュセールのイデオロギー論に関する批判的論文であり、ぜひ参照してほしい」と述べられている²⁰⁾。

「アルチュセールのイデオロギー論についての批判的検討」の第一の特徴は、アルチュセールのイデオロギー論を単純に、直接的に批判する

のではなく、その拠って立つ基礎となつてゐる諸理論を含めて批判の対象としてゐることである。向井氏は、アルチュセールのイデオロギー論の主要な部分がフロイトやラカンの議論に依拠していることに注目し、その基礎から批判することによつて、イデオロギーを科学的に明らかにするためのより広い見地を獲得しようとする。

たとえば向井氏は、アルチュセールの「イデオロギー一般は歴史をもたない」との主張がフロイトの「無意識は永遠である」、「無意識は歴史をもたない」という議論に依拠していることについて、「私は、フロイトの夢の分析は文化の理解にとつて重要な認識の一つと評価したいと考えるし、無意識について重要な知見を与えられていると思うが、しかし、イデオロギーの歴史貫通性は、無意識との連関ではなくて、むしろ逆に、人間の実践の意識的性格との連関から考えたい」と批判する。さらに「無意識とイデオロギーとの関係をとくに階級社会において考えるときと、二つの点を見てもおかなければならない。フロイトの無意識は個人的なものであるということ。また、イデオロギーの社会的虚偽性が社会的なもののある重要な点（であること——引用者）を認識していない、あるいは認識してもそれを誤つて合理化しようとしていることである。これらの関係においてもそれを誤つて合理化しようとしていることである。フロイトの無意識よりも、フロイトの「社会的無意識」の方が意味がある」と言う。

また、アルチュセールがイデオロギーの構造をラカンに依拠しながら展開することについて、「アルチュセールは、ラカンの精神分析の「鏡像段階」との関係でイデオロギーの論理構造を捉えようとするようであるが、マルクス主義者でありながら、マルクス自身における立脚点を示していない。私は、マルクスの商品の価値形態論、一商品の価値を表現するために、他の商品の使用価値を自分に等置するという回り道をとること、その意味で、他者を自己に等置する構造がそこに明らかにされて

いること、こういう連関において探求しないと、イデオロギーの理論を史的唯物論の立場からうちたてる立脚点を見失つてしまうことになりはしないか、と思う」と述べている。

さらに向井氏は、アルチュセールのイデオロギー論を批判するにあつて、自らの拠つて立つ基礎についても、単純にマルクス、エンゲルス、レーニンだけでなく、二〇世紀の諸科学の成果によつて広げようとする。これが第二の特徴である。

向井氏は、批判の基本的見地を次のように説明している。「精神分析や言語学の前進、あるいはそれに、文化人類学や発達心理学、さらには霊長類学などもつけ加えて、主体ということについて、科学的にその形成過程を明らかにしていける条件が整いつつあるのであつて、科学的な意味での主体概念とイデオロギー的な意味での主体概念を対比・検討する観点をもたなければ、文化やイデオロギーについての科学的な一般理論はうちたてられないと思うのである」²⁰。そしてじつさいに氏は、精神分析のフロム、心理学のルビンシュテイン、エリクソン、ピアジェ、言語学のチョムスキー、霊長類学の今西錦司氏などの研究成果に依拠しながら、自らの主張を展開している。

さて、そのようにして展開される向井氏のイデオロギー論の基本は、イデオロギーの発生と機能は「人間の実践の意識的性格」から説明されなければならないということである。イデオロギーは歴史貫通的なものだとするアルチュセールの主張について、現在の階級社会と将来の無階級社会におけるイデオロギーの性格のちがいをみなければならぬという留保をおいたうえで、氏は「イデオロギーが歴史的なものではなくて歴史貫通的なものという問題提起を、しかし、私は、ある意味で承認したいと思う。それは、人間の実践の意識的性格」という点からである。科学的な認識によつて自然や社会についてそのすみずみまで知りつくさ

れている状態は想定しにくいことであるし、人間の実践は世界のなかでの、社会のなかでの自分の位置についての理解を前提し、世界のさまざまな問題に対処するにあたって、矛盾の解決やそのための方途について、完全な認識をえることができていなくても、一定の理解にたつて実践せざるをえないからである」と言う。

このイデオロギーの理解は、人間が意識的存在であるという人間本性の理解にもとづいている。そのうえで、科学的な認識が世界のすべてを明らかにできるわけではなく、また、すべての人びとにいきわたるわけでもないという面があるのだから、そのかぎりでは科学的認識とは別の意識が人びとの実践の基礎にならざるをえない。それこそがイデオロギーだというわけである。このようにイデオロギーを人間の実践の意識的性格から理解することによって、イデオロギーはたんなる虚偽意識であるという誤った理解を乗り越えることができるし、人間が社会の主体になつていく過程でのイデオロギーのはたらきと科学的な認識のはたらきとの相互作用も考えることができるようになる。

以上の見地から向井氏は、主体の形成にかかわるイデオロギーのはたらきについてアルチュセールは重要な問題提起をしていると積極的に評価しながら、その解決のあり方を批判する。第一は、アルチュセールが「主体はイデオロギーのみ構成される」と考えていることへの批判である。「この問題提起にこたえるためには、同時に、主体についての科学のカテゴリーが必要であると私は思うが、アルチュセールにとっては、主体とはイデオロギーの概念でしかないのである。それがアルチュセールの問題提起のいわば土壌であり、そこに基本的な弱点があると思われる」²⁸。つまり、主体の形成においてはイデオロギーのはたらきだけでなく、科学的認識のはたらきを考えなければならぬということである。

第二は、アルチュセールが主体をイデオロギーの呼びかけにもつばら

受動的にこたえる存在としてとらえていることを向井氏は批判する。「イデオロギー的な主体の構成というとき、呼びかけが「他者」からくるといふその論理的構造と、そこで主体が「主体」となるための主体の側の「洞察」との関係が、問題にされなければならない」²⁹。ここでは、社会の主体となるにあたって諸個人はたんに受け身の存在ではなく、主体的に洞察する存在であることが示されている。

このようにアルチュセールを批判しながら、向井氏は主体の形成過程の科学的理解を追究する。そこに散在する断片的な言及をもとに考えると、氏は人間が社会の主体となる過程について、諸科学が明らかにしている人間の生物学的基礎、現実的な人間の本質としての物質的社会関係とイデオロギー的社会関係、そこでのイデオロギーの作用、科学的認識にいたる主体の側の洞察などの要素で考えようとしていたと思われる。

なお向井氏は、このような主体の形成への理論的な関心から、アルチュセールのイデオロギー論のなかで家族や学校や宗教についてとくに注目している。たとえば、アルチュセールが国家イデオロギー装置論において近代社会における主要なものは学校・家族であるという点について氏は、近代においては法律的イデオロギーが主要なものだという上野俊樹氏の主張に賛同しつつ、次のように言う。「アルチュセールが主要なものが何かと考える観点は、そのイデオロギー論について見たように、人間の社会化、主体形成がいかにおこなわれているか、という観点からであると思われる。…(略)…人間の社会化の問題にも国家がいかに介入しようとしているか、という意味で、私はアルチュセールの問題提起の意味を理解したい」³⁰。ここにはアルチュセールの問題意識のありようととも、氏の問題意識のありようが示されていると私は思う。

本質的に意識的な存在である人間がどのようにして社会の主体に成る

かを科学的に明らかにしようとする向井先生の探究は、上野先生のイデオロギー論の展開とともに、私が学生と接するための導きの糸であった。私は、大学生のとき以来、社会科学を研究する自主的な学生サークルにかかわっており、また今日においても、いくつかの学生サークルとつきあっている。青年期の悩みを抱える学生たちとの右往左往しながらのつきあいであるが、問題にぶつかったとき、その解決を模索するさい、いつも手がかりになっているのは向井先生と上野先生によって展開されたイデオロギーの理論、主体形成の理論である。今後もお二人の理論によく学び、それを発展させる努力をしながら、学生とかかわっていきたいと思っている。

Ⅲ 「主体の学」をめざして—— 新しいマルクス主義哲学の探究

一九九〇年代以降、向井先生は既存のマルクス主義哲学について深く反省され、二一世紀という新時代に立ち向かう新しいマルクス主義哲学のあり方を真摯に探究された。二つの出来事がこの探究の契機となったと私は思う。

一つは、一九八九年のベルリンの壁崩壊、一九九一年のソ連邦の崩壊に代表されるヨーロッパで「社会主義」を名のった諸国の体制崩壊であった。多くの誠実なマルクス主義者は、すではるか以前からこれらの諸国の体制を政治的に支持していなかった。向井先生もそうであった。とはいえ、いったんは社会主義の理想をかかげ、二〇世紀の世界の哲学・思想に大きな影響を与えた一つの体制の崩壊を目の当たりにして、向井先生はこれまでのマルクス主義哲学のあり方をきちんと思想的に反省し、新しい時代のマルクス主義哲学を鍛えなければならぬと考えら

れた。²⁹⁾

もう一つは、一九八七年に鈴木茂先生が急逝されたことである。向井先生は、見田石介先生亡き後、鈴木先生こそがマルクス主義哲学を発展させる理論的指導者であると考えられていた。その鈴木先生が急逝されたことで、向井先生は、ご自分をその理論的系譜を継ぐ者としてはつきりと位置づけられた。³⁰⁾そして、その立場からヨーロッパの「社会主義」体制崩壊後の世界に立ち向かおうとされた。

私は、こうした九〇年代以降の向井先生の探究を間近にみて、おおいに触発された。

向井氏の探究の第一の基礎は、諸科学の成果から謙虚に学び、そのうえでものを考えるという見田氏、鈴木氏の学問的な態度を継承することであった。氏は見田氏、鈴木氏の研究姿勢について次のように言う。「いずれも哲学者ということですが、今の哲学の発展のためには、哲学史を研究しても哲学の発展はない、そういうふうには決意された方でもあったと思います。ある時代から見田先生はほとんど、『資本論』とか経済学の研究をやられたということになると思います。また、鈴木先生が見田先生の継承者のような立場にならなければならなくなりました。先生は生物学とか言語学とか、非常に勉強することになったわけです。そして、そこから新しい唯物論のありかたということを出してこられたと思います」。³¹⁾

この態度はヨーロッパの「社会主義」体制の崩壊によってさらに深化する。向井氏は言う。「イデオロギー批判とか哲学の諸立場の批判のあり方について、考えておく必要がある。唯物論と観念論というのは哲学の根本的対立であり、もちろん軽視すべきことではないが、様々な哲学の立場について、その階級的立場を指摘して能事終われりという態度に

われわれはなっていないか、ということである。この点では、ヘーゲルに学ぶ必要がある。批判すべき哲学の長所を自らの体系上に位置づけることが、その最も本格的な批判になるということである：(略)：いわゆるブルジョア哲学とされるものについてのマルクス主義的批判も、こうでなければならぬと思う^②。さらに「現代の唯物論については、マルクス主義者だけが前進させているのではないことを考えるべきである」とも言う。

こうして氏は、幅広く現代科学の成果を学ぼうとする。たとえば、イリヤ・プリゴジン、マリオ・ブンゲ、エドガール・モラン、フェルナン・ブローデル、イマニエル・ウォーラステイン、ミッシェル・ボーなどがその対象であった。また、こういう見地から日本の哲学的伝統を総括しようとする^③。

向井氏の探究の第二の基礎は、見田氏の理論的継承者である鈴木氏の学問的到達点をわがものにするのであった。その第一の内容は、向井氏が「合理的唯物論」と呼ぶものである。それは認識主体が外界を反映するさいの能動性を、その認識装置が進化のなかで獲得されたものであると示すことをつうじて明らかにする。そしてそれは、これまでの唯物論がもつばら経験論的であったことを補って、唯物論の認識論をより包括的なものにする。

向井氏は言う。「鈴木先生は、私から名づけますと合理的唯物論という意味の新しい立場を打ちだしてこられたというふうに思います^④。「合理的唯物論は、こういう言い方ではガストン・バシユールの主張にあるものであるが、鈴木茂先生が重要なものとして強調された、ロレンツの種に生得的となった世界像装置やチョムスキーの普遍文法の主張にもある立場である^⑤。「レーニンの『唯物論と経験批判論』は、その中心が経験概念の唯物論的理解を明確にしめすことにあるのであって、

それが重要であることを確認しつつも、もう一つ、合理論の唯物論的あり方が明確にされない」と、唯物論的認識論の全体像が明らかにならないが、鈴木茂先生の合理論の評価はそれに応えるものとなっている^⑥。

向井氏が鈴木氏から引き継ぐべき第二の内容として考えたのは、種—主体の進化論および人間の本性と人類発展史の包括的理解であった。向井氏によれば、鈴木氏は生物の主体としての論理を種—主体として分析したのであり、その延長上に人間の類的本性(人間の意識性と社会性)を把握し、そのうえでその本性が展開する過程として、原始共同体という第一次構成体から階級社会という第二次構成体へ、さらに未来に展望されるより高次の構成体へという系統発生的人類史をとらえようとしたのである。

向井氏は言う。「見田先生は、資本のいわば主体としての論理を分析したのであり、鈴木先生は、生物の主体としての論理を分析しようとしていたのだと言える。鈴木先生が、個中心の目的論と種中心の目的論を区別し、特に種—主体を問題とされたのは、以上のように位置づけることができるのではないか。鈴木先生の議論においてはじめて、機械論と目的論の理論的統一が可能になったと、私は理解したい^⑦。「種—主体を問題とすることは、人類について、その類的本性と系統発生的人間史観を問題とすることにつながり、生物進化論と人類史を統一的に理解する理論的立場を切り拓くこととなる^⑧」。

これらの鈴木氏の研究成果をもとに向井氏は「主体の学」を構想する。「鈴木先生の学問研究は多方面におよんでいるが、：(略)：自然史全体を主体の観点から見るような大きな見方があると思われる。しかし同時に、生物史に対する社会史の根本性を考える視点をもっている。そこから、環境問題を人類も含めた全生命システムのあり方として考える理論へと発展させることができるのではないだろうか^⑨。自然および社会

における主体とはなにか。人間はそのなかでどのように位置づけられるのか。新しい探究がスタートする。

しかし、この探究の成果が向井氏自身の手によって体系的に叙述されることはなかった。突然の病によって探究が中断されたからである。遺されたものはいくつかの構想ないしはテーゼ集と講義録である。それらを見ると、氏の探究を構成する要素は次のようなものではなかったかと私は理解している。^④

一つは、モランが提起する複雑性の問題をふまえて弁証法的唯物論を豊かにすることである。そのさい、自然と社会を分析する見地として階層性という問題を深めること、無秩序―相互作用―(自己)組織化―秩序というサイクルを考えること、そこに創発ということがらを位置づけること、偶然性のなかで貫く必然性について偶然性を捨象するだけにとどめない分析のあり方を考えること、等々が課題であったと思われる。

もう一つは、「再生産」を現代最大の人類的課題ととらえる見地から史的唯物論を反省することであった。自然・人間・社会が十全に再生産される社会を将来社会のあり方、あるいは人類の課題と考え、そこから人類史を反省するという見地である。ここでは、社会を動態的にとらえるために生産様式と社会構成体という概念をとらえなおすこと、あるいは原始共同体↓奴隷制↓封建制↓資本制という直線的・図式的な歴史理解を反省し、自然と人間との相互作用という見地から見直すことなどが課題とされる。また、自然・人間・社会の再生産という見地から現代社会の諸矛盾もとらえなおされる。たとえば、今日の若い世代はシチズンシップを獲得することがままならなくなっている。あるいは環境問題が人類にとっての脅威となつてきている。これらのことこそが現代社会の矛盾の深化を表わしている。そして、そうした諸矛盾は資本のグローバル化によって生みだされているものである以上、その解決のためには真のイ

ンターナショナル、世界連邦政府を構想する必要があるとされる。

向井先生の一九九〇年代以降の探究はついに完成した著作という形をとることはなかった。けれども、その過程の折々に親しくお話を聞く機会を得た私にとっては、たいへん刺激に満ちたものであった。なにより現代科学の成果をきちんと学び、摂取しようとする先生の姿勢と問題提起は、不勉強な私にとってつねに新しい世界への扉を開く導きの手であった。この導き手を失ったいま、私はしばし呆然と立ちすくむしかない。しかし歴史は進む。どんなに非力であっても、先生の姿勢を受け継ぎ、若い世代とともに新しい探究をすすめていかなければならないと思っている。

IV 次世代を育てる―教養教育を守り発展させる

向井先生の一九九〇年代以降のもう一つの仕事は、教養教育の守り手としての活動であった。大学改革の嵐のなかで、旧一般教育、教養教育をないがしろにするような専門主義が横行するなかであって、先生は大学における教養教育の大切さ、必要性を深い洞察のうえにくりかえし説かれた。先生が折にふれて展開される教養論は、大学内の多忙な日常のなかで専門主義に走ってしまいがちな私にとっての戒めであったし、先生の話聞く若い仲間にとつても一つの道標であったと思う。

向井氏がこの時期、大学教育とそのなかでの教養教育の問題についての考察をすすめたのは、直接には一般教育の実践者であったからである。氏は大学のなかで一般教育全体に責任を負う立場にあり、専門主義とのたたかいの最前線に立たされていた。氏にとって、このたたかいは日本

社会の担い手をいかに育てるのかという問題であった。「オルテガ・イ・ガッセツトは、一九三〇年にヨーロッパの文明を批判して「専門主義の野蛮性」ということを言いましたが、現在、世界の中で日本の人材養成が最も専門主義的ではないかと私は思っています。日本の政治家の発言には哲学が感じられないと言われたりしますが、その教養に弱点があるということ暴露しているんだと思います。日本のいろんな方面の実力者の多くが、実はそうなっているんだと反省を迫られているんだと思います」⁴³。

同時に、向井氏の教養教育についての考察は自身の理論的な探究に支えられていた。氏が人間の社会化、社会の主体形成に理論的な関心をもっていたことは、すでに本稿Ⅱ、Ⅲで見たとおりである。その見地から氏はヘーゲル『精神現象学』を引きながら「教養とは、社会的な事柄全般についての判断能力を形成することである」と言い、人間の共同的本質が疎外されている近代市民社会においては「教養とは、人間の社会的共同の本質からの、類からの人間の疎外をいかに克服するかの問題なのである」と言う⁴⁴。氏にとって教養とは人間が人間らしい社会をつくるための基礎的能力だったのである。

そして、この見地から人文、社会、自然の三系列三科目均等履修という旧大学設置基準について、多様なカリキュラム展開の必要を認めつつも、日本社会にとってのその歴史的意味を考えている。「旧制高校のカリキュラムにおける教養の考え方は、人文主義的教養と自然科学の基礎知識に力点が置かれていて、文系、理系のいずれを見ても、社会科学系科目の位置づけが著しく低いことが分かる。この位置づけの低さは、競争責任の問題について、高等教育のカリキュラムの考え方における思想的弱点として指摘されるべきものとさえ言えるものとなっている。三系列三科目という戦後の一般教育の考え方は、あの無謀な戦争を阻止す

ることができなかった、戦前の高等教育機関卒業生のあり方について反省し、人文主義的教養や自然科学の基礎知識と対等の位置づけにおいて、社会科学の教養を位置づけるべきだという考え方に立ったものである、今、私はそう思う」⁴⁵。

こうして向井氏は教養教育における社会科学重視の立場を明らかにしている。しかし、それは他分野を軽視することを意味しない。氏は言う。「〔学生に——引用者〕広い視野をもつための学習とは何かを考えさせなければならぬと思います。例えば、法学部の学生が：（略）：自然科学の一科目も履修しないようでは、近代の科学とは何かという理解はほとんどもてない。自然科学を知らないようでは、科学技術の発達する時代、環境問題が裁判になったらどうするのか、新製品の開発が裁判になったらどうするのか、科学技術が関係することは一切扱いませんという弁護士を養成するんかということになるわけですね」⁴⁶。

そして向井氏は教養を身につけて育つ人間像を、「人間は本性的に政治的動物だ」というアリストテレスの規定やグラムシの知識人論を引きながら次のように描く。「グラムシは、新しい知識人のあり方を問題にして、指導者としての自己形成のあり方を専門家プラス政治家と言った。大学生は、社会のどのような分野において専門的力量を発揮して、有能な社会人となるのかを考えなければならぬ。しかし、有能な社会人とは、同時に、社会形成についての政治的自覚をもつことである」。「われわれは、古典的な理論家の人間観の中心に政治的自覚の問題がおかれていることを考えなければならぬ。なぜなら、それが本格的人間の中心的能力をなすからである」⁴⁷。

このように向井氏は人間らしい社会をつくる人間をいかに育てるかという見地から自らの教養論を展開している。同時に、それを単に理念として示すだけでなく、今日の大学の中でいかに実現していくのかにつ

いても探究している。そこでの問題は、一方ではいわゆる大学の大衆化であり、他方では科学研究や社会の発展との関連において求められる大学教育の高度化である。

一方で向井氏は、大衆化する大学を積極的に評価し、そこでの学生の成長の場を幅広くとらえるべきだと考える。「大衆化した大学における、青年の成長にとって大学とは何かということから、あらためて考えることが必要だと思えます。これまでは、古典的には、大学は「学問によって教養を磨くところ」であつたと思いますが、学問によってだけではないうという、そういうニューアンスで、「学問を軸として教養を得るところ」と書かせていただきました⁴⁸。「ひと頃、大学のレジャーランド化という言葉がありました⁴⁹が、…(略)…ある場合には、大学院に進学するような学生しか眼中になくて、言っている場合もありうると思えます。そうではなくて、入ってきた学生みんなが、どう成長するのかということを考えることが必要だと思えます。その時には、正課だけではなくて、課外のサークル活動とか、アルバイトとか、ボランティア、就職活動です。そういう全体、トータルの学生生活の中の学生の成長、そういうふうな観点が必要じゃないかと思えます⁵⁰」。

他方、大学教育の高度化の要請に対して、向井氏は大学院も含めた大学教育の新たな構造を模索しつつ、そのなかに教養教育を位置づけることを求めている。「産業の高度化、文化・文明の高度化によって、職業教育の高度化は必然であつて、大学教育は一方でそのことを真剣にうけとめるとともに、職業教育と人間形成の関係を明確にした教育の追求が重要となる。他方で、研究と教育の統一という大学の理念の擁護は、大学院の制度的確立によってはたすことが重要となる⁵¹」。そのさい「二つのことが考えられている必要がある。一つは職業教育と教養教育との関係であり、もう一つは学部と大学院の関係である。アメリカのリベラル

アーツカレッジの例は、教養教育の後での大学院での高度の職業教育という形態と関係がある。また、学部教育として職業教育を展開する場合でも、専門教育と教養教育との関係をどのようにつけるのが考えられなければならない。現在日本で進んでいるような一般教育の軽視の動向は、あらためて考え直される必要がある。…(略)…学士課程教育の一貫した体系のなかでの教養教育の新しいあり方の探求が必要だと言いたいのである⁵²」。

そして向井氏は、今日の大学で大学教育の目標を実現するため、大学教員と学生との関係の再構築の必要を論じる。氏は勤務校である立命館大学の学部教育を念頭に置きながら、次のように言う。「比較的ある分野に関心を持ち、そこに熱意があつて、やっっていく学生については、それをつかむシステムをそれなりに開発してきている…(略)…。それから問題を起す学生も、学生部や教授会で指導しないとイケない、ということになっています。ですけど、その間の普通の学生というのでしようか、…(略)…：普通に授業を受けているだけの学生というのを、大学はどのように考えているのか、ということがあると思えます⁵³。「この意味で、あらためて四年間一貫した小集団教育体系をつくるということが必要だと思えます⁵⁴」。「それで、クラス担任が必要じゃないかと私は思います。…(略)…：学生は進路のことをはじめいろいろ迷っています。そういう相談を比較的气楽にできるような先生がいるということが、非常に重要だと思えます⁵⁵」。このように、氏は小集団教育と学生の相談者としての教員の役割に注目している。ここに氏の教育者としての基本姿勢がよく現われていると私は思う。

向井先生の大学教育論は、人間らしい社会を形成する主体的な人間を育てるという見地で貫かれている。さらにその洞察は、大学の外の社会

における人間形成にも向けられていた。とくに一九九〇年代の不況なかで日本社会の青年が自立の困難を抱える状況は、「再生産」を現代社会の最大の課題と考える理論的構想へと氏を導いていったのだと私は考える。「実践的に重要な課題であるからこそ理論的に明らかにしなければならぬ」という「理論と実践の理論的統一」の立場はここでも貫かれていた。

いま、私は大衆化した大学の最前線にいる。その中で、人間らしい社会の担い手を育てるといふ、向井先生が主張される大学教育の基本をどのように実現していくのか。現実重い。それでも、向井先生に学んだ「理論と実践との理論的統一」の立場に立つて悩みながら探究を続けようと思っている。

おわりに

向井先生の仕事は、思いもよらぬ病によってもたらされた死のために十分に完成された形をとっていない。とくに一九九〇年代以降の探究についてはそうである。遺されたものは、問題提起であり、探究の基本的な方法であり、いくつかの構想であり、テーゼである。しかし、そこには私たちが考えなければならぬ問題、その問題に挑むための刺激、あるいはその解決に向けたヒントがあると私は思う。だから私は先生の仕事の全貌を遺したいと考えている（『向井俊彦の探究』（仮題）全三巻が二〇〇八年五月より刊行される予定である）。そのことをつうじて、私自身もう一度向井俊彦先生から学び直すつもりである。

注

① 本稿は「向井俊彦さんを偲ぶ会」（二〇〇六年二月一〇日、京大会場）における報告をもとに執筆した。なお、本稿の執筆にあたっては、向井

氏が二〇〇一年に京都中央労働学校でおこなった連続講義「フオイエルバッハ論」と現代」の記録を手引きとした。この講義は向井氏自身による自らの仕事の総括という面をもつ。

② 向井俊彦『唯物論とヘーゲル研究』文理閣、一九七九年。

③ 同上書、第Ⅱ部、とくに「哲学の根本問題と実践概念」七九～八九ページ、を参照。同書ではそればかりではなく、第Ⅰ部では「認識論、方法論の基礎」が展開され、第Ⅲ部では「ヘーゲルの精神論」の唯物論的解釈が展開されている。また、向井氏自身は第Ⅱ部を「史的唯物論の基礎」と位置づけている（同上書、あとがき、二二五ページ）。

④ 「われわれが変革の立場、実践の立場というとき、えてして、理論と実践の理論的統一の観点を忘れてしまいやすいことについて、スターリ主義が理論活動に対してどういう作用をおよぼしたかをふまえて、反省している必要がある」（向井俊彦「これからの唯物論のあり方をめぐって」『唯物論と現代』第二二号、一九九八年六月、五七ページ）。

⑤ 「分析的方法を基礎とする弁証法的方法とはどういうものか」前出『唯物論とヘーゲル研究』六五ページ。

⑥ 同上、六七ページ。

⑦ 同上、六九ページ。

⑧ 同上、六九～七二ページ。

⑨ 同上、七三ページ。

⑩ 前出「哲学の根本問題と実践概念」同上書、八三ページ。向井氏は、「戦後のマルクス主義哲学の原理的發展という点で、とくにルビンシュテインと見田石介氏の業績が重要である」と二人を並べて評価している（前出「分析的方法を基礎とする弁証法的方法とはどういうものか」同上書、七四ページ）。

⑪ 「哲学の根本問題と実践概念」同上書、七九～八〇ページ。

⑫ 同上、八二ページ。

⑬ 同上。

⑭ 「では意識の理論的な活動とは何であるかが問われることになるが、それには、知覚と思考の両方をもとに分析・総合活動として考察しているルビンシュテインの見解が非常に重要である」（同上、八三ページ）。

- ⑮ 同上、八四ページ。
- ⑯ 同上。
- ⑰ 同上、八五ページ。
- ⑱ 向井俊彦「アルチュセールのイデオロギー論についての批判的検討」『唯物論と現代』第二号、一九八八年九月、同「ハーバマスの『コミュニケーション的行為の理論』をめぐって」『唯物論と現代』第三号、一九八九年一月。
- ⑲ 上野俊樹『経済学とイデオロギー』『上野俊樹著作集』文理閣、第一巻、所収。同『アルチュセールとブーランツァス』『上野俊樹著作集』第三巻、所収。
- ⑳ 前出『上野著作集』第三巻、三九ページ。
- ㉑ 前出「アルチュセールのイデオロギー論についての批判的検討」二二ページ。
- ㉒ 同上。
- ㉓ 同上、二九ページ。
- ㉔ 同上、三二ページ。
- ㉕ 同上、二一ページ。
- ㉖ 同上、二七ページ。
- ㉗ 同上、二九ページ。
- ㉘ 同上、三八～三九ページ。
- ㉙ 「現代のマルクス主義哲学については、いわゆる東西冷戦終結後は、いわゆるレーニン主義的段階：（略）…をこえていることを明示することがぜひとも必要である。私はロシア革命は偉大であったと思うし、レーニンも偉大であったと思っているが、しかし、歴史は進んでいるのである」（向井俊彦「これからの唯物論のあり方をめぐって」『唯物論と現代』第二号、一九九八年六月、五四ページ）。
- ⑳ 「私は積極的に自分の学問を位置づけるときには、見田石介―鈴木茂一〇〇〇の、〇〇〇〇に向井俊彦と自分の名を入れて考える」（同上、五三ページ）。
- ㉑ 向井俊彦「鈴木茂先生の学問について」『唯物論と現代』第一号、一九八八年六月、六七～六八ページ。

向井俊彦先生に学ぶ

- ⑳ 同「今、マルクス主義哲学の課題を考える」『思想と現代』第二八号、一九九二年一月、七三ページ。
- ㉑ 前出「これからの唯物論のあり方をめぐって」五四ページ。
- ㉒ 向井俊彦「日本の思想研究は普遍性をもちうるか」『唯物論と現代』第一七号、一九九六年八月。
- ㉓ 前出「鈴木茂先生の学問について」六五ページ。
- ㉔ 前出「これからの唯物論のあり方をめぐって」五四ページ。
- ㉕ 同上、五四～五五ページ。
- ㉖ 同上、五五ページ。
- ㉗ 同上、五五～五六ページ。
- ㉘ 同上、五七～五八ページ。
- ㉙ 向井氏は自らの死を予感するなかで、次の三つの仕事の完成をめざした。第一に、二〇〇一年に京都中央労働学校でおこなった連続講義「『フオイエルバッハ論』と現代」の記録に補筆して出版すること、第二は、著書『唯物論とヘーゲル研究』出版後に執筆した諸論文に加えて、「史的唯物論の再構成」および「複雑性について」という二つの課題で新たに論文を執筆し、論文集を編むこと、最後にこれまでにおこなったヘーゲル『大論理学』に関する講義をまとめることであった。氏はこれらの仕事のなかで一九九〇年代以降の探究をまとめようとしていたと思われるが、結局それは果たされなかった。
- ㉚ 以下の叙述は、すでに引用した諸論文に加えて、連続講義「『フオイエルバッハ論』と現代」の記録、および二〇〇六年四月三〇日におこなわれた最後の講義「史的唯物論の再検討」の記録によっている。
- ㉛ 向井俊彦「今、私学の一般教育を考える」『大学教育学会誌』第二三巻第一号、二〇〇一年五月、二八ページ。
- ㉜ 同「教養・人間形成の意味とは何か」『立命館教育科学研究』第二号、一九九二年三月、一〇五ページ。
- ㉝ 同上、一〇三ページ。
- ㉞ 前出「今、私学の一般教育を考える」二八ページ。
- ㉟ 前出「教養・人間形成の意味とは何か」一〇六ページ。
- ㊱ 向井俊彦「コメント「学生の個性と大学教育」の観点から」『京都大学

高等教育研究』第三号、一九九七年一〇月、一三四～一三五ページ。

④9 同上、一三五ページ。

⑤0 向井俊彦「『大学の理念』をめぐって」『立命館教育研究』第六号、一九九五年七月、一九ページ。

⑤1 同上、二〇ページ。

⑤2 前出「コメント」『学生の個性と大学教育』の観点から」一三六～一三七ページ。

(流通科学大学情報学部教授)